OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代大学生を対象とした自己発見・学習の必要性とその課題
Author(s)	香川, 順子
Citation	大阪大学教育学年報. 2005, 10, p. 165-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第10号（2005年）
Annals of Educational Studies Vol.10

現代大学生を対象とした自己発見・学習の必要性とその課題

香川順子

【要旨】

日本社会の移り変わりにより、アイデンティティ形成過程の特徴が変化している。それと同時に、現代大学生の生き方も、自分のやりたいことを見つけ、それをもとにして新たな社会へ出て行くという生き方に変化してきている。また、現代の日本の若者に見られる特徴として、自分を見失うといった自己実現から離れる傾向、コミュニティへの帰属、責任へ対する感覚の希薄化といった自己中心的傾向が見られ、複雑に絡み合った学生の変容が、従来の大学のシステムでは十分に対応できなくなっている。

そこで本研究では、自己実現、アイデンティティという概念と現代の若者の特徴を考慮しながら、現代大学生の発達をとらえ、レディネスという視点から自己発見・学習の提案を行うことを目的とする。

1．はじめに

1．1．　背景

本研究での大学生という用語は、青年期後期と呼ばれる18歳から22、23歳くらいの年齢期に相当する若者を指している。一般に、青年期はアイデンティティの危機が中心課題となるといわれている。エリクソンの提唱するアイデンティティは、ライフサイクルにおける青年期の心理社会的危機、つまり自己実現の主題として導きだされてきた（鑪2002）。最近では、青年期に関する研究は圧倒的に多く、質的な研究が注目されている（岡田2002）。これは様々な要因が考えられるが、そのひとつとして、時代や文化などの環境的側面を考慮し、質的な青年期研究が注目されるようになったことが挙げられる。それは、次の先行研究からもうかがえる。

エリクソンの提唱する自我同一性、すなわちアイデンティティの形成は、1950年ごろのアメリカでは妥当したかもしれないが、現在の日本社会では必ずしも合致しないようである。なぜなら、現在の若者は、自我、社会にあまり関心を抱かず、多くの者が自我同一性に関する問題、すなわちアイデンティティ形成より先に、他者との対象関係の問題に直面するからである。また、たいていの者はアイデンティティの問題に直面することなく大人になる。（福島1999）

社会・文化的側面を考慮したアイデンティティ形成の変化の問題につては、高学歴化、少子化、経済的豊かさによるモラトリアムの長期化という問題の他にもいくつかの理由が考えられる。第一に、個人主義のアメリカ文化と集団主義の日本文化の違いを考慮し、日本人特有のアイデンティティ形成の仕方を見直す必要性が出てきたこと。第二に、時代の流れと共に若者世代が交代し、戦後の豊かな社会を目指す社会の中で達成すべき課題と、ある程度豊かになった社会の中で達成すべき課題が変化したこと。第三に、国際社会、高度情報社会により、社会が多様化、複雑化してきていることから、アイデンティティ確立の過程も、多様化、複雑化し、より複雑な概念になっていることである。

このような状況による若者の変化は、すでに現代大学生の生き方にも現れている。1990年代以降の大学生は、自分のやりたいことや将来の目標から出発して、それを実現するためのコミュニティ（場所）を探すという生き方が主流となっている（インサイド・アウト）。それまでの大学生は、やりたいことや将来の目標といった自己の中身より、「より上級の学校へ」「二流よりは一流へ」といった学歴トラック、レールの質のほうが、人生形成の基準として重要であり、「大人社会」を基準として、それを目指し「内」的世界を形作るという生き方であった（アウトサイド・イン）。エリクソン・アイデンティティ論は、青年が大人社会に参入すること、大人になることを第一義として人生を形成する「外」から「内」へというアウトサイド・インの文脈においてはじめて機能する概念なのである。（溝上2004）

1．2．　目的と方法

以上の背景から、本研究では、時代、社会・文化的側面を考慮し、先行研究から若者の特徴的な要素を取り入れ、大学生の生き方支援を提案することを目的とした。しかしアイデンティティの定義は、自分内部の歴史や時間（知識や経験）、他者との空間的なかかわり、時代や歴史、文化的背景といった多様な要素と関係しており、簡単なようでなかなか複雑な概念である（鑪2000）。そこでこの複雑な概念をできる限り整理し、自己発見・学習の位置づけを行う。その上で、大学においてこれから必要となる自己発見に関する学習支援の提案を行う。その方法として、文献調査をもとに、現代大学生に見られる特徴とその問題点を明らかにし、自己発見・学習の定義と育成すべき能力について整理する。

2．偽りの自己－分裂的人間関係の時代

時代、社会、文化の変化により、現代人は急激な変化の中で生活するようになってきた。テクノロジの進化により、生活の中に効率化された機器が導入され、人々の生活の速度は速くなり、産業、経済社会の効率化のため、時間をいかに効果的に使うかが求められるようになった。また、インターネットの普及、衛星通信の進歩により、テクノロジに支援される交流が促進され、国を超えた交流など遠隔地での相互交流も盛んになっている。しかし一方で、新しい時代の到来により現代社会は混乱し、様々なシステムの見直しがせまられている。

このような時代の中、モリス・バーマン（Morris Berman 1981）は人間精神の変容に注目し、次のように人間関係を捉えている。我々の心は、解体と崩壊への道を歩んでいるように見える。事実と価値が乖離した近代では、哲学的、宗教的に突き詰めたものとしての「意味」を失ってしまった。人生を歩むひとりの人間にとって深くかかわってくるのが、この「意味」の問題である。科学革命が起こる以前には、人間は疎外された観察者ではなく、宇宙の一部として、結びつきを持ち、そのことが人々に意味を与えていた。このような意識のあり方を、モリスは「参加する意識」と呼び、近代において忘れられている、参加する意識の重要性を指摘すると共に、生態学的視点を重視している。

またモリスは、R.D.レイン（R. D. Laing 1960）の自己と他者の理論を用いて、近代の自己と他者の関わりを次のように説明している。健全な自己と他者の関係の中では、「生命の漲る自己」が他者をリアルに認識し、意味ある行為を行うが、分裂的人間関係の中では、「偽りの自己」が他者をうつろに認識し、無意味な行為を行う。この偽りの自己が捉えた世界はリアルなものではなく、行為から意味が抜け落ち、誰もが演技し、他者を操作しようとするのである。その結果、不安にとりつかれ、空虚さ、無意味さにさいなまれるようになるのである。

モリスがいうように、現代人の心はストレスを抱えやすくなり、虚無感にさいなまれ、無気力になり、生きる意味を見失う者が増加している。モリスの提唱する理論に基づけば、それは必然的なことであり、避けられないことなのかもしれない。こういった「偽りの自己」が紡ぎだされることで、「心の病」と言われる傾向は一般化していると言えるだろう。それは、うつ病、自殺率、カウンセリング相談者の増加というデータからも分かる。相談者の相談内容に注目すると、例えばある国立大学の学生相談機関では、心理適応相談のうち、特に対人関係、性格問題に関する相談件数が多く見られ、その来談人数は年々増加していると言われている（青木1996）。現代の日本では、特に若者にそういった傾向が見られるようである。

3．現代若者の特徴

和田（2001）は、精神科医の臨床経験に基づいてアイデンティティ意識のなさから自分のなさを訴える若者は多いと指摘している。具体的には、他人を怖がり自分の本音を見せない、人との深いかかわりは避けるが他人との同調はうまい、自分がなく「みんなと同じ」に合わせることに一生懸命といった特徴が見られ、これらの病理は精神分裂病者の、心の中の世界と共通していると指摘する。

また、岡田（1993）によれば、現代青年は、内省の乏しさ、友人関係の深まりの回避といった特徴を示

しているという。そしてこうした特徴と共通した対人恐怖症の概念として、自分自身への関心からも対人関係からも退却してしまう心性を「ふれ合い恐怖的心性」と呼び、青年の研究を行っている。ここで注意すべきことは、そういった傾向が見られるということであり、「一方では従来の青年像と合致する青年も一定の割合存在している」ことも忘れてはならない。

エリクソンはモラトリアムを、アイデンティティが形成されていく一定の時間としているが、現代ではこの概念が合致しない若者が増えているようである。高学歴化、少子化、経済的な豊かさの中でモラトリアムが長期化しているが、このモラトリアムの機能が十分に機能していない。それは、社会的責任を無限に引き伸ばし、幼児的な万能感と欲求の追及に浸っている人間として若者をとらえた「モラトリアム人間」(小比木1981) からもうかがえる。これと共通する概念として、濱田(2004)も「モラトリアム人間」をとらえている。

戦後の高度成長期に、国や社会のために自分を捨ててでも日本繁栄のためがんばってきた「アイデンティティ人間」に対し、そのような強いアイデンティティを持つ世代により導かれ、豊かな社会の中で育った者を「モラトリアム人間」とする。アイデンティティ人間とは、「自己を同一化すべき自分を超えたような対象、すなわち自我理想を強く持っている人たちである。自我理想とすべきもの、そういう対象に対しては忠誠心や強い帰属感を持っており、責任感や当事者意識を強く持っている」人間である。それに対してモラトリアム人間とは、「強烈にアイデンティファイする、同一化すべき対象を持たない。常に一時的、暫定的な関わりしか持たない。忠誠心や帰属意識が比較的希薄である。そして、義務や責任を回避しようとする」心性を持った人間である。現代の若年、中年層はモラトリアム人間であり、若い世代になるにつれてそのモラトリアムの心性が強くなっていく。

以上の諸説からみてもわかるように、現代の若者は偽りの自己を紡ぎだし、分裂的な人間関係の中で自分を見失い、無力感にさいなまれながら、むなしく生きているという傾向が見られるということになろう。それは、内省の乏しさからくるものと考えられ、それが友人関係の回避にもつながっていると考えられる。また、「モラトリアム人間」という概念からは、コミュニティへの帰属と責任という感覚を持たず、自己中心的にふるまう傾向が見られ、それは世代が変わるごとに肥大化する可能性もある。これらから、現代の若者の特徴は大きくいって次のようになろう。ひとつは、モラトリアムの機能不全、自分を見失うなど、自己実現から離れる傾向。もうひとつは、偽りの自己による対人関係の希薄化、自己愛による自己中心的傾向など、歪んだ対人関係を示す傾向である。こうした現状では、自己実現教育ということで自己実現メッセージを与えるだけでは十分でなく、正しい自己認知、自己理解を行うことと同時に、本物の自己と他者の関係を築くことが重要課題となる。

4．自己実現とアイデンティティ

若者に自己実現を意識させ、他者とよりよい関係を築きながら正しい自己認知、自己理解を行うことは、現代の日本の若者にとって重要課題である。また、アイデンティティは自己実現の主題であり、両者は密接な関係を持っている。そこで、自己実現、自己と他者の関係から個人の発達をとらえると次のように言えよう。

自己実現とは、自らの可能性を完全に実現し、真の自己自身になることである。マズローの欲求階層理論によれば、人間の基本的欲求にはいくつかの階層があり、ひとつの欲求が満たされると、それよりも高次の欲求を満たそうとするという優先順位が存在する。人が生きていくためには、生活するうえで最低限必要な「欠損欲求」だけではなく、人が成長するうえで欠かせない「成長欲求」、すなわち「自己実現の欲求」が必要である。マズローの自己実現は、成長の最終目標と考えられがちだが、これは「成長の力動的過程」(Maslow 1962) であり、こうした過程としてとらえられる限り、「自己認識や自己理解は自己実現へ向かう重要な道」(Frank G. 1970) となる。本研究での自己実現とは、マズローが『完全なる人間』で提唱しているような、自分のあらゆる可能性をのばし、より完全な人間になるという意味で用いている。さて一方で、自己をとらえる際に重要になってくるのが、自己をとりまく環境的（空間的）側面である。

そこには、時代、文化、社会などの比較的大きな枠組みと、より小さな枠組みとして、学校、地域社会、家族などが含まれる。そこには他者が存在し、自己は他者との相互作用によって発達していくと考えられる。

現代の日本人のアイデンティティ形成においては、自己と他者が相互に補足、促進し進行する「人とつながりつつの自己実現」がアイデンティティ形成に不可欠であると指摘されている。特に、社会的文脈の中でアイデンティティを形成すること、すなわち「他者との関係性」を重視する観点は意義深く、「自分というもの」と「ひと」を確かに感じとりながら「人とつながりつつの自己実現・自己確立」を図るところに、アイデンティティ形成の過程がある。(無藤1999)

そこで多様化、複雑化が進む社会的背景を考慮しつつ、自己と他者との関係性に注目し、現代日本の若者の、アイデンティティ形成の過程を、自他の相互作用という視点からとらえることにした。すなわち、時間的側面としての自己実現ベクトル、環境的側面としての関係性という二つの側面においてアイデンティティ形成に注目し、個人の発達がとらえられる。

5. 自己発見学習とは

以上に見てきた現代の若者に見られる特徴とその問題、自己実現とアイデンティティ概念をもとに、次に自己発見学習を、自己実現と教育の関わり、自己と他者との関係性から説明していく。

先にも述べたように、心の問題、自己の問題は病的な者の特別な問題ではなくなりつつある。それは一方で教育において取り扱うべき課題になりつつあるということである。スクールカウンセラーが設置されるようになったが、年々相談者が増加しており、その内容は悩み方が分からないなど、従来ならば自分で解決してきたような問題まで訴える者が年々増加している（自明性の喪失)。これは自分のそばにアドバイスのできる重要な他者の存在が求められていると考えられる。

相談者の増加傾向が続き、ある程度健全な学生の相談数が増加すれば、カウンセラーだけでは対応できなくなるだろうし、病的な者のカウンセリングに十分に対応できなくなるだろう。専門的なカウンセリングの知識を必要としない問題であれば、ある程度アドバイスのできる他者により、学生自身の問題把握や、問題解決が可能になるであろう。近くに重要な他者が居れば、カウンセラーにとっても、相談者にとっても効率的である。また、自己発見のスキルを育成することで、カウンセリングを必要としない者も出てくるだろう。時代、社会的背景からくる問題をふまえると、教育現場のシステムを見直し、重要な他者との関係性を形成するための支援、自己発見の学習支援を行うことは必要なことなのである。そして、大学生活を継時的にとらえ、大学教育と学生相談をつなぐこと、自己理解を促進する教育を行うことが重要な意味を持つ（鶴田2002)。本研究では、このような視点からも自己発見・学習をとらえている。

また、自己発見・学習は、自己実現の教育ともいえる。教育と自己実現の関係について、佐々木（1993)は以下のように述べている。教育とは、被教育者および学習者が、自己肯定的な価値を「自己発見」するための「援助」の役割を果たすものである。自己実現的な教育では、自らを不自由に束縛している価値意識や固定観念への「気づき」が重要であり、それらの徹底的な相対化が必要とされる。そして、＜現在＞の充実の反復および積み重ねこそが、自己肯定的な価値の創造・形成を促進するのである。

この佐々木の概念に従えば、教育とは、そもそも自己実現の支援をするものでなければならない。教育により自分が何に束縛されているのかに「気づく」こと、そして現時点での自己理解を行い、自己肯定感を持つことで、充実した時を積み重ね、自己実現への道を開く支援をすることが重要なのである。「現在」の自己が満たされていれば、それは自己実現によりつながりやすくなるのだ。

この点については佐々木も同様に、「＜現在＞への集中は、未来への執着の放棄であっても、未来そのものの放棄ではないから、＜現在＞における「可能性の発揮」は、結果として「未来における成功」につながりやすい。未来における充実・成功とは、自己実現的な＜現在＞の充実の延長および広がりとして現実的に開けてくるものである。」と述べている。現時点での自己理解と、自己肯定感を維持するためにくり返し支援を行うことは、自己実現を達成するうえで意義深いことである。

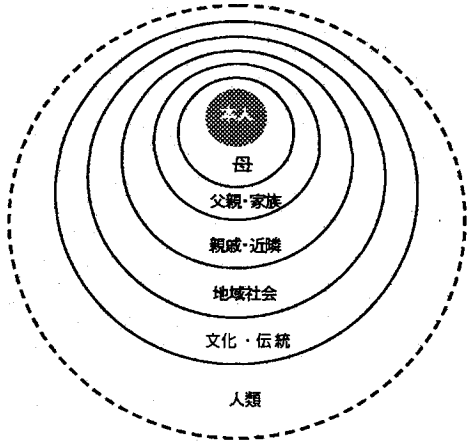

図1 相互性の概念(鑪 2002)

そして、鑪（2002）の関係論的立場から見たアイデンティティ形成の過程では、個人がそれを取り囲む環境条件から影響を受け、身体や心の成長といった個人レベルでの変容が進み、アイデンティティの再構成が行われると考えられている。特に自他の相互作用によりアイデンティティの形成が促され、より深く自己を知るきっかけとなる。

エリクソンは相互性(mutuality)の概念に注目し、関係論的立場から個人の発達をとらえた。その概念を、個人を中心とした同心円モデルにまとめている（図１）。これは、個人が発達していくに伴い、他者との関係をモデル化したものである。円の内側から順に、両親、家族、近隣、学校における人々、友人グループ、特定の異性、地域文化、人類全体からなる相互性を重視した対人関係を示している。鑪はこのモデルに関して「われわれが発達するにつれて、対人関係の範囲がただ広がっていくことを意味するというより、それぞれの対人関係の範囲は、力動的に緊密な関係をもって存在していることを意味している」と指摘している。(鑪2002)

この概念に従えば、アイデンティティ形成の過程を考える場合、他者との相互関係のみならず、個人が属しているコミュニティや文化、社会的背景を無視できない。アイデンティティ確立を中心課題とする大学生の時期においては、重要な他者との関係の中で自己を見直すことが個人の発達に欠かせないものであるし、生涯発達の面から見ると、この時期に形成された他者との絆は、後の人生においても欠かせないものとなりうる。社会へ旅立つ準備の段階である大学生の時期に、自分を正しく認識し、行動することは後の人生にプラスとなる。社会へ出た時に苦しい時期がやってきても、健康な心を取り戻す術を学んでいれば、何らかの解決策を自分で見つけることができるはずである。そのような健全な心を維持することで、我々はよりよく生きることができるし、自己実現していくのである。

以上の先行研究から、自己発見・学習において、現代大学生に必要な二つの支援が明らかになる。ひとつは、過去、現在、未来をベクトルとしてとらえる、自己実現的態度、もうひとつは重要な他者とのよりよい関係性をつくる、自他肯定的態度の育成である。それは同時に、問題解決（自己調節能力）の育成にもつながる。すなわち、自己発見の学習とは、自己実現的態度と自他肯定的態度を育成することを目的とし、自己実現と自己と他者の関係の中でよりよく生きるすべを身につけるためのものである。言いかえれば、自己発見の道筋づくり、環境づくりを支援するものである。次にこの概念を、個人内(personal)、個人間(interpersonal)、コミュニティ(community)という三つのレベルに分け、自己発見・学習における個人の発達過程を説明していく。(図２参照)

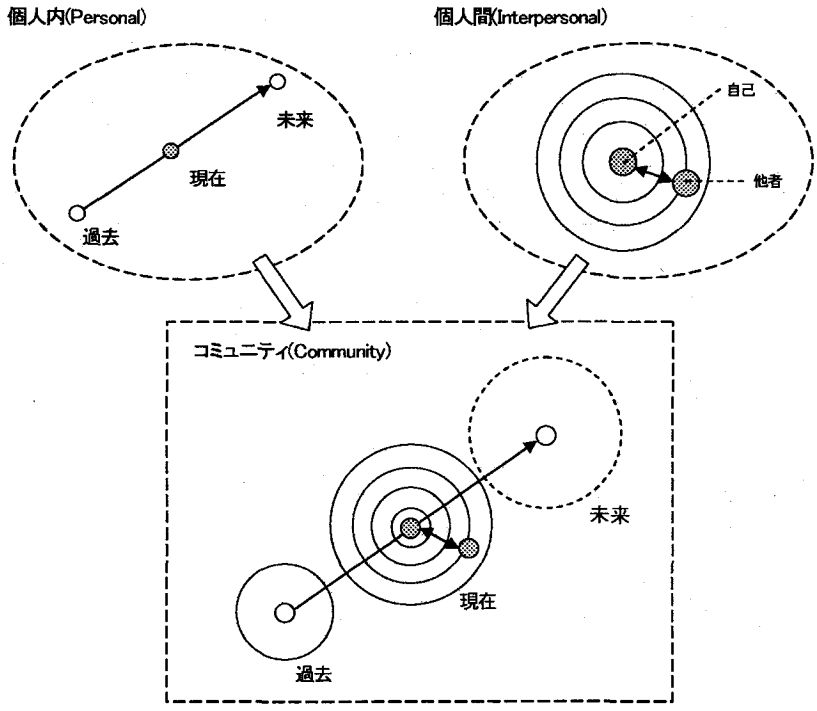

図2 自己発見・学習における個人の発達の過程

○ 個人内(Personal)
現在、過去、未来を意識させ、自己内省することで、個人内に自己実現の道、すなわち、個人の目標ベクトルを作れるようになることを目標とする。

○ 個人間(Interpersonal)
自分を中心とし、それを取り巻く環境の中で、重要な他者との関係を通じて新たなことを学習し、自分の中に取り入れていく過程を示す。(他者を認めることで重要な他者となる)

○ コミュニティ(Community)への参加
コミュニティの中で個人間のやり取りを通して学習し、自己実現ベクトルの未来の方向へ進む。その先には、コミュニティへの十全的参加という目標がある。このような過程を繰り返し、アイデンティティ形成がなされていく。

6．プログラムの開発

以上より、自己実現的態度、自他肯定的な態度の育成を目指し、自分の性格の認識、将来へ向かっての適切な自己形成、うまく他者と交流するためのスキルの習得を支援することを目的とした自己発見支援プログラムの開発を行った。目的ごとに内容を三つに分類し、「Ⅰ．自分の性格に関する分析」、「Ⅱ．将来へ向かっての自己分析」、「Ⅲ．コミュニケーション場面での自己分析」とした。各項目の内容とねらいは表1に示すとおりである。

表1 プログラムの内容とねらい

内容	ねらい
Ⅰ. 性格に関する自己分析	
1．エゴグラム（交流分析）で自己分析	自分の性格について、強さ、弱さもあわせて理解する
2．長所を短所に書き換える	短所が長所にもなりうることを理解する
Ⅱ. 将来へ向かっての自己分析	
3．小・中・高の私	過去をふりかえり、現在の自分との連続性をイメージする
4．将来の人生に望むもの	自分が将来求めているものについて理解し、現状把握する
5．ミッション・イン・ライフ	自分の天職を考え、自身の存在意識を理解する
Ⅲ. コミュニケーション場面での自己分析	
6．OKグラム（交流分析）	人間関係における基本的な交流の構えを理解する
7．アサーティブ度診断とロール・プレイ	正しい自己主張を理解する
8．インジャンクションとネガティブ思考の発見	自分の中の歪んだ思考を理解する
9．対人関係場面の再現と自己洞察	相手の立場を考えて交流することを理解する

7．おわりに

「自分の探求」に関する導入（初年次）教育は、京都大学において「学び支援プロジェクト」として実践されている。具体的な内容については、学生の学びを「大学生活」や「大学生」という側面から焦点を当てて支援する「大学生活編」と、大学での学びを真正面から問題にし、探求することで学生の学びを支援する「学び探求編」である（溝上2004b）。本研究では、「学びの支援」をするというより、「学び」のための準備を行うといったレディネスの意味合いが強いことをここで述べておきたい。こうした初年次教育の実践報告は、筆者の知る限りではまだ見られないようである。現在、プログラムをある女子大学で実験的に初年次教育として実施しているが、これについての実践報告は、次の機会にゆずりたい。

＜引用・参考文献＞

・青木健次　1996　「やまいとなやみ、問題と課題－より活発な相談活動をめざして」　『こころの科学』　通巻69号　日本評論社，pp.27-32.
・R.D.Laing. 1960　The Devided Self: An Existential Study in Sanity and Madness. Tavistock.　坂本健二　志貴春彦　笠原嘉訳　2003（初版1971）『引き裂かれた自己』　みすず書房.
・岡田努　1993　「現代の大学生における『内省および友人関係のあり方』と『対人恐怖的心性』との関係」『発達心理学研究』　第4巻2号　pp.62-170.
・岡田努　2002　「青年期・成人期・老年期の発達研究の動向について」　『教育心理学年報』　第41集　pp.63-72.
・小比木啓吾　1981　『モラトリアム人間の時代』　中央公論社.
・佐々木英和 1993　「『自己実現』の教育論・学習論的意義の検討－時間論的視点からの一考察－」　『東京大学教育学部紀要』　33巻　pp.247-256.
・鑪幹八郎 2002　『アイデンティティとライフサイクル論』　ナカニシヤ出版　pp.49-75.
・鶴田和美　2002　「大学生とアイデンティティ形成の問題」　『臨床心理学』第2巻第6号（通巻12号）　金剛出版, pp.725-730.
・濱田庸子　2004「ジェネラティビティ・クライシス(generativity crisis):＜次世代を生み育てる心の＞危機とは？」小比木啓吾　濱田庸子　山田康『＜次世代を育む心＞の危機－ジェネラティビティ・クライシスをめぐって』慶応義塾大学出版会　pp.1-30.
・福島章　1999　「日本人のアイデンティティ－緊急課題ではないアイデンティティ形成」鑪幹八郎　山下格『アイデンティティ』　日本評論社　pp.1-11.
・Frank G. 1970 The Third Force: The Psychology of Abraham Maslow. Grossman.　小口忠彦　1972『マズローの心理学』
・Maslow, A. H. 1962 Toward a Psychology of Being. Van Nostrand.　上田吉一訳　1964　『完全なる人間― 魂のめざ

すものー』 誠信書房 pp.38-47.
・溝上慎一 2004a 『学生の学びを支援する大学教育』 東信堂.
・溝上慎一 2004 『現代大学生論ーユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』 日本放送出版協会.
・Morris Berman. 1981 The Reenchantment of The World. Cornell Unversity. 柴田元幸訳 1989 『デカルトからベイトソンへー世界の再魔術化』 国文社 pp.13-23.
・無藤清子 1999 「青年期とアイデンティティ」, 鑓幹八郎 山下格 『アイデンティティ』 日本評論社 pp.49-60.
・和田秀樹 2001 『「自分がない症候群」の恐怖』 PHP研究所.

A Proposal for Self-Discovery Learning for Contemporary University Students

KAGAWA Junko

As Japanese society has gone through significant changes, university students also have changed their developmental processes of establishing their identities and their ways of life. This paper focuses on their way of life in regards to how they try to find themselves and what they want to do, and how they eventually become new members of the society. A common problem among Japanese youth now is that they escape from self-actualization, and tend to become more self-centered. Facing a situation as such, the educational system of university is showing functional problems.

The purpose of this study is to propose a way of learning that promotes self-discovery for university students from the perspective of readiness and restructures developmental process of youth taking the issues of self-actualization and identity into consideration as well as the problems of Japanese youth.